

服装史より (5)

——流行の変遷を裏づけるもの——

A Historical Study of Costume

山本登美子

I はじめに

ファッションがその時代の政治、社会、思想状況の反映である、とはしばしば指摘されてきたことである。たしかに、服装史、とくにここ数十年の服装史をふり返ると、ファッションが激動をつづける世界とそこに生きるひとびとの精神のありようを的確に写しつづけてきた鏡であったことがよく理解できる。

だが、「人間の内面は外観によって表現される」という言葉もまた真実である。なぜなら、ファッションは、ただ受動的に時代を映すばかりではなく、その中に思想や主張を表現し、ひいては社会の流れや動きを変えていく能動的な力をも秘めているからである。この相関関係の中に、ファッションというものの真の魅力があるといえるのではなかろうか。ここでは、68年から73年に至るパリコレクションの軌跡をたどり、その中に現れたいくつかの問題について若干の考察を試みることにする。

この6年間のファッションの動きをふり返ってみると、そこに浮かび上がってくるのは、「多様性」と「転換」という二つの言葉である。

かつてのように、ひとりのデザイナーが世界をリードする時代は遠く過ぎ去ってしまい、それぞれに異った資質、思想、ヴィジョンをもった多くのデザイナーたちが、めいめいの立場からさまざまな方向で（もちろん相互に影響し合いながら）表現活動を行っているのが、現代のファッションの見取図であろう。また世界のファッションの中心としてのパリの地位、あるいはオートクチュールそのものの機能や地位についても大きな変化が起こりつつある。しかも、自然発生的、あるいはそれに近いファッションが、これまでとはまったく違った状態から生まれ、育っていることも見逃せない。

ファッションが時代の反映であると考えれば、これらの現象は、世界政治の多極化、経済構造の大きな変動、思想やイデオロギーにおける絶対性の崩壊、環境や資源問題の深刻化などに代表される時代の変化、つまり絶対的な価値体系の喪失によって多様な価値観が同時に存在する現代そのものの忠実な反映と見ることができよう。

また、ファッション・デザインの創造や、あるひとつのファッションを選択する行為そのも

のを人も人間の内面の表現であるとするれば、多様な価値観にもとづく多様な思想が、このようにさまざまなファッションの創造や着るという行動となってあらわれていると考えられるであろう。

時代の感覚を最も敏感に反映するのがファッションとするならば、世界が混とんとした状況の中で未来の方向を模索している現在、おそらくファッションもまた混とんとした状況をつづけるであろう。

しかし同時に、混とんの中に未来のヴィジョンを追求する努力と、さまざまな試行錯誤のくり返しの中で、時代の動きの中から多くの栄養分や生命力を吸いあげながら、ファッションが豊かな花を咲かせつづけるであろうこともまた疑いのないところである。

II パリコレクション '68~'73 の動き

1968年5月、パリ大学に発した学生運動はやがて労働者のゼネストにまで発展し、パリを中

心とするフランス経済は危機に陥った。このため、'68~'69 秋冬パリコレクションの開催も一時危ぶまれたほどであったが、さまざまな障害を乗り越えて、とにかく開幕された。シーズンに先がけていろいろな予測が乱れとんだが、その中でいちばんの関心事はオートクチュールのプレタポルテ化が強まるのではないかということだった。ジャックエイム (Jacques Heim) の主任デザイナーに、プレタポルテデザイナーのジャック・ドラエイ (Jacques Delahays) が迎えられたことも、この傾向に拍車をかけるものと思われた。結果として、このシーズンの一般的傾向はプレタポルテ色の強いものとなる。実用的な着やすさが重視され、若々しいムードと自然なラインが強調された。たとえば、ブレザー、ピージャケット (船乗りなどの着る両前打合いのもの)、ダッフルコートなど、ジャケットやスポーツ用コートが大量に登場した。また、ウエストを自然な位置に置き、ベルトや紐で締めたり、バンド風切替えを扱ったりしてバストを強調し、スカートにフレアーを入れたフィット・アンド・フレアーのシルエット、プロポーションを $\frac{3}{4}$, $\frac{7}{8}$, $\frac{9}{10}$ の分数としたコート、スーツ、ドレスなどに見られるチュニック・ルック (図1) も、この傾向を代表するものといえる。しかし、このシーズン最大の特色は、サンローラン (Yves



図1 分数のプロポーションのチュニックスタイル

Saint-Laurent) の「シテイ・パンツ」に代表されるパンツ・スタイルの台頭であろう。「シテイ・パンツ」は、ヒップからストレートになだらかな線をもつ筒型のシルエットで、裾は靴をかくしてしまうほど長く、パンツのヘムは広がっている。サンローランはこれを、従来のスポーツウエアやレジャーウエアとしてでなく、街やオフィスでもはく日常着として、スカートとともに基本的な服装の型式としたいとその意図を語っているが、エレガントでしかも行動的なプロポーションは大きな評判を呼び、その後のファッションの流れに大きな影響を及ぼすことになる。(図2)

パンタロンは、ファッションの中で正当な市民権をもつようになったといえるのである。

また、サンローランをはじめとしてこのシーズンにあらわれたいくつかのシーズルルールックも、ファッション及び、その思想の転換という観点から見落せないものであった。

'69年春夏は、一口にいえば造型の原点を、それぞれの立場から探求した模索のシーズンであったといえる。したがってそこには全体を統一するヴィジョンは見られなかったが、新しい時代に適合する新しい可能性を切り開こうとするデザイナーたちの意欲は大いにうかがえた。

つねに造型的なアイデアの実験を試みるカルダン(Pierre Cardin) は、シメトリーやアンシメトリーの技法を駆使しながら、曲線のさまざまなバリエーションを大胆に展開した。(図3)

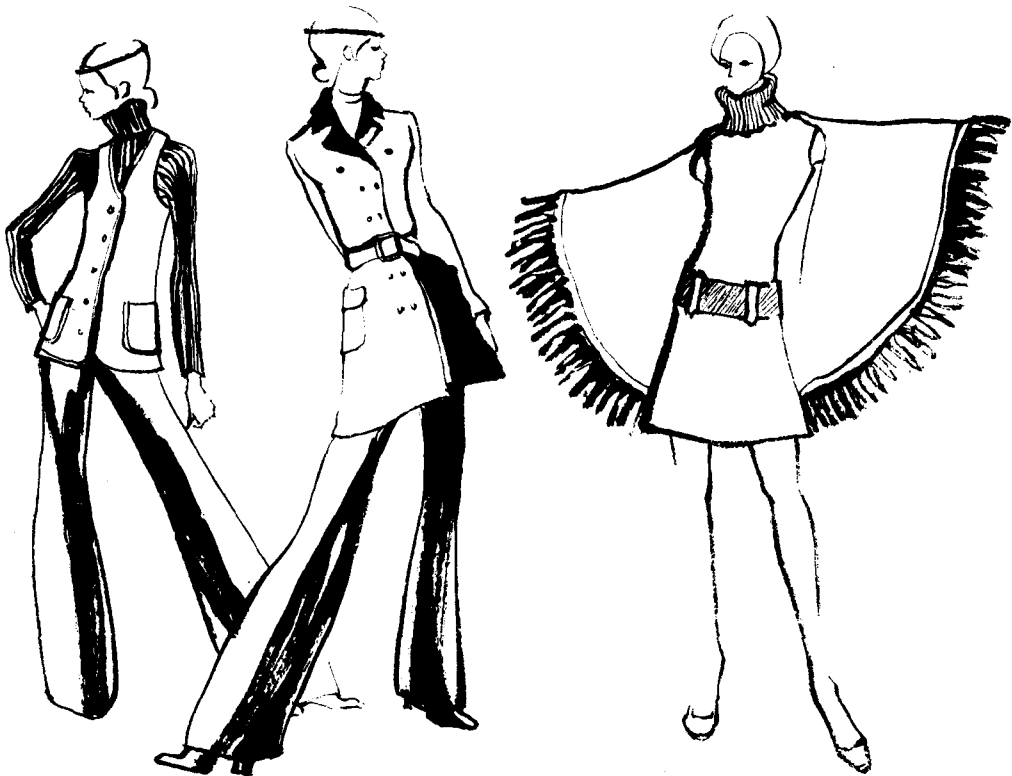


図2 Saint-Laurent

図3 Pierre Cardin

クレージュ (Ardre Courreges) は、彼本来の主張である健康でユニセクスの女性像を、白を効果的に生かしたシンプルで力強い造形の中で表現した。マヌカンには全部カラーのかつらをかぶせ、そばかすのメイクアップを強調したところなども、この主張の現れであるといえよう。

ディオール (Christian Dior) の店のマルク・ボーン (Marc Boan) のコレクションには、かつての世界のモードをリードした時代とは違って、ナチュラルな若々しいシルエットの中に、大多数の女性に着られるファッションへの志向がうかがえた。

サンローランは、前シーズンにつづいてパンタロン中心のコレクションを発表した。たとえば、角張った肩線とルーズなウエストに特徴のある長い丈のポロシャツ、さらにその上に着る細身づくりのミデイ丈のカーディガンコートとの組合せには、新しい時代の新しい女らしさが見ごとに生きているように感じられる。

このほか、サファリ・ルックのパンツ・スーツ、部屋着スタイルのコートとVネックのセーターブラウスを組合せた夏のシテイ・パンツなどが注目された。

このように、いくつかの個性的なコレクションを除いては、全体にソフトでエレガントな作品が多数を占めたシーズンではあったが、このバラエティの中から何か新しい方向が生まれてくることを期待させたシーズンでもあった。

'69~'70年に冬のパリコレクションを特徴づけたのは、「ニューロング」と呼ばれる新しい丈と、長い寿命を保ちつづけたミニとの対比であり、静的な美と動的な美とのコントラストであったといえよう。

「ニューロング」というのは、床上り30センチ前後の丈の、ステッキや鉛筆を思わせるきわめて細く長いシルエットのことである。

ドレスの場合は、ウエスト、あるいはヒップからゆるやかなフレアをとり、コートは短いチュニックドレスやニットのマニドレスと組み合わせるか、あるいはパンタロンと組み合わせるといった方法が多く採用されていた。この「ニューロング」はとくに夕方の服に多く見られ、生地には黒のクレープや、多色の細かいベーズリーの紗のラメ、しゅすなどが使われて、1920年代を思わせる優雅な感覚にあふれていた。

「ニューロング」を代表するのは、サンローランとディオール店のボーンであり、そのほか、ラ・ロッシュ (Guy La Roche)、ニナ・リッチ (Nina Ricci) 店のピパール (Gérard Pipart)、ジャン・パトウ (Jean Patou) 店のミシェル・ゴマ (Michel Goma) などがある。

(図4, 5)

一方、動的な美を追い求めたのは、カルダン、クレージュ、ルイ・フェロー (Louis Feraud)、テッド・ラピドス (Ted Lapidus)、パコ・ラバンヌ (Paco Rabanne)、ウンガロ (Emanuel Ungaro) たちであった。軽快に動きまわることによって美しさが表現される服である。ただし

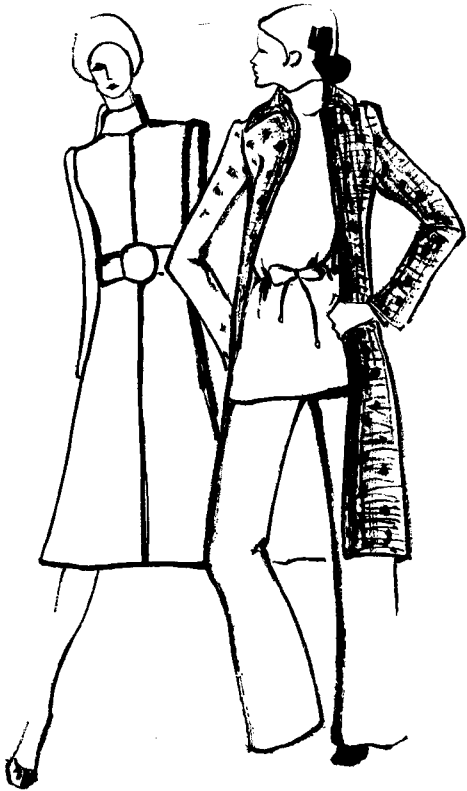


図4 図5 Saint Laurent



図6 Ungaro

これらにはニュー・ロングのようにひとつのパターンはない。細く締まったバストの下に、ミニと長いブーツ、ダークなストッキング、あるいはボディストッキングとの組み合わせがあれば、ストッキングのように細いパンタロンがあり、タイツが多く使用されるなど、表現方法はそれぞれに異ったが快活なダイナミズムへの志向には共通したものがあつた。(図6)

そのほか特記したいのは、この静的と動的な美のいずれにもかかわらず、これまでにない新しい着方、新しい組合せが現われていることだ。セーターにベストコート、パンタロン、ロングジャケット。ジャンプスーツやキユロットドレスにベスト。パンツスーツの上にさらにスカートを重ねるとか、巻きスカートをはずすと下からジャンプスーツが現れるなど、自由な試みがいろいろとなされ、ファッションの新しい可能性への萌芽が強く感じられた。

次の'70年春夏のシーズンでは、静的な美と動的な美、つまりクラシック派とモダン派はいつそうあざやかな対比を見せるようになる。

ここ数シーズン、話題と関心呼びつづけたスカート丈は、大勢はミデイ、マキシにあるとはいふものの、ひざ上30センチのミニから、くるぶしまでのマキシにいたるまでさまざまな長さが共存していた。しかし、だからといってモダン派はミニ、クラシック派はマキシやミデイ

といった、単純な分け方はできない。モダン派のリーダーといえるカルダンを例にとると、ひざ上30センチのミニがあるかと思えば、床上15センチのロング丈があるといった調子で、丈の長さそのものはクラシックかモダンかのバロメーターにはなっていない。むしろ、多数を占める長い丈を使って何を表現するかで分かれていたわけである。つまり、ミデイやマクシを過去のエレガンスのリバイバルとして表現している店と、ミニとパンタロンよりも新しい服と考える店に分かれ、同じマキシやミデイを使った異なる表現によって、このコントラストがよりいっそうあざやかに浮き彫りされたといえるのである。

したがってデザインは多様をきわめたが、その中で注目されたものとしては、スポーティでカジュアルな印象を与えたディオールの細身のキユロットスーツ(図7)短いドレスと長いコート을組合わせて、これまでになくソフトなイメージを打出したウンガロ(図8)などがあった。

'70年~'71年秋冬のシーズンには、比較的顕著ないくつかの特色があらわれた。

スカート丈がほとんどロングによって占められたこと、パンタロンに代るパンタクルの登場、ロシアをはじめ、中央アジア、中国など民俗調の進出、などがそれである。



図7 Dior



図8 Ungaro

服装史より(5)

長いスカートはほとんどのクーチュリエが採用し、クレージュでさえも長いコートを発表したほどであったが、しかしその中でも前シーズンと同じようにその表現法には大きな違いが見られた。クラシックなスタイルの服のスカート丈だけを長くした古くさいイージーな表現法をとった店もいくつかあったが、これに対して、ロングを独創的に活用して現代的な若々しさや未来志向をめざしたコレクションも多かった。たとえば、クレージュやカルダンは、長いスカートの前中央、後中央、両脇などに大胆な深いスリットを入れたり、ニットのボディタイトやローカル色豊かなセーターと組合せたり、パターン、素材、色の使い方に工夫をこらしたりすることによって、独創的な作品を生み出している。(図9, 10)

また、クラシックなシルエットを採用しながらも、デリケートな表現の技法によって新しさを出しているのが、サンローラン、ディオール、(ポーアン) ウンガロたちであった。

パンタロンが一般の中に定着してしまったために、パンツのさらに新しい可能性を求めようとして登場したのがパンタクルであった。裾の広がったパンタロンを七分丈で裁ち切ったパンタクル、ごく幅の細い七分のパンタクル、裾をしばったニッカーボッカーやコサックパンツなどさまざまなものが見られ、材質や組合せによってスポーティなもの、エレガントなもの、民族調のものなど多彩なデザインが試みられた。(図11, 12)



図9 Courreges 図10 Cardin

図11 Dior 図12 Saint Laurent

民族調ルックの中心になったロシアンルックには二つの傾向が見られた。一つはニッカースやキユロットとブーツ、毛皮の帽子、毛皮のトリミングのロングコート、裾幅の広いスカートやゆったりしたマントなどを使ったコサック風であり、モチーフは、毛皮のコートやケープをまとい、裾広がりドレスに身を包んだ帝政ロシア時代のモスクワ風であった。このロシアンルックや、コーカサスなど中央アジア風ルックがデザイン処理に工夫をこらしながらも比較的本来のイメージに忠実であったのに対して、サンローランが中国のししゅうを一見悪趣味な「ロンドン・ポップ」調に処理した一連のデザインは、批評的態度を保ちながら十分に消化して自分の独創とした点で話題を呼び、高く評価された。(図13)

'71年春夏のパリコレクションが開幕する直前の1月10日、ココ・シャネル(Gabrielle Chanel)が87歳の生涯を閉じた。シャネルスーツと呼ばれた独自のモードを現在まで一貫して守り通した彼女は、最近では世界のファッションに大きな影響を及ぼすことはなかったが、彼女の死は転換期にあるパリのオートクチュールにとって大きな損失であり、また象徴的な出来事であることは疑う余地がない。

しかもこのシーズン、多くのオートクチュールが膝小僧をかくす長さのシャネル・レングスをとり入れた。「女らしいエレガンス」を求めるパリオートクチュールの一つの流れにとっ



図13 Saint Laurent



図14 Saint Laurent

て、やはりシャネル・レングスはいつか帰って行くべき故郷であったのかも知れない。この長さを1940年の占領時代のイメージの中に生かしたのがサンローランであり、ディオール、ニナ・リッチ、ジャン・ルイ・シエレル(Jean-Louis Scherrer)、バルマン(Pierre Balmain)、パトウなどもまたこの長さの作品を多く発表している。

(図14)

しかし、このシーズンの最大の話題は「ホット・パンツ」だった。ニミ丈のパンツで、これまではショーツと呼ばれて夏になると愛用されていたものだが、これを街着やおしゃれ着、あるいは夜の服の新しい形式として取り入れた点がまったく新しいといえる。これを扱わなかったのはシャネルとジャック・グリフ (Jacques Griffe) ぐらいのもので、ほとんどの店がこれをとりあげた。もっとも同じホット・パンツとはいっても、クレージュのように主にニットを素材にしたスポーツ選手ふうのものから、サンローランやディオールのように1940~45年代の戦中戦後ルックを思わせるもの、深いスリットのある長いドレスと組み合わせたカルダンなど、店の個性によってイメージの違いは見られた。(図15)

しかしこのホット・パンツも、次の'71~'72年秋冬のシーズンには、クレージュを除いてほとんど姿を消し、かわって「洗練されたエレガンス」がパリ・コレクションを支配することになる。これは、ホット・パンツがすでに一般に広く浸透したためであるとも考えられ、また振子が一方に振れすぎると、次には反対の方に振れて絶えずバランスをとろうとするパリの特質を現わしたものととも考えられる。

したがって、そこには無性格ともいえるほどにきわ立った特徴は見られなかった。ある一つの時代や一つの地方のファッションへの傾倒がなくなり、エレガンスというものの本質をそれぞれの立場で考え直そうという姿勢がうかがわれた。

その中で、クラシックで、おとなしい昼のエレガンスと、ドレスアップした夜のエレガンスを打出したのが、ディオール、バルマン、ニナ・リッチなど、そしてエレガンスの中に独特の個性やアイデアをとり入れて、強い印象を与えたのがサンローラン、カルダン、ウングロ、ランバン (Lanvin Castillo)、ルイ・フェロー、ラ・ロッシュたちであり、また若々しいイメージをストレートに打出したアルマン (Jean-Marie Armand) の仕事も注目された。(図16, 17)

エレガンスへの回帰に向かったパリ・コレクションは、次の'72年春夏のシーズンにもその傾向をうけついで。しかも、いっそう洗練された上品さ、女らしい落ち着き、シンプルな軽快さを追求しつづけているように見える。

たとえば、プリンセスラインに代表されるフィット・アンド・フレアーや優雅なブラウスと組み合わせたスリーピースが多く登場し、ラグランスリーブ、フリルとラッフル、プリーツな

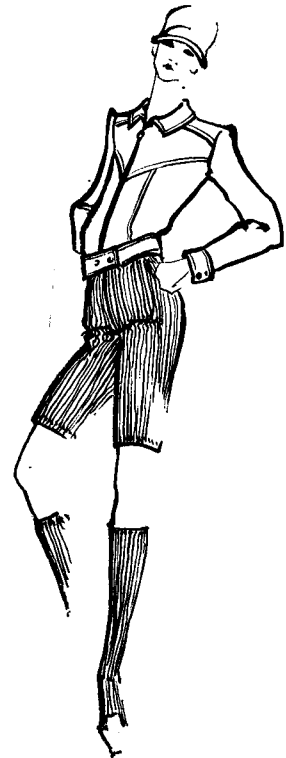


図15 Courreges

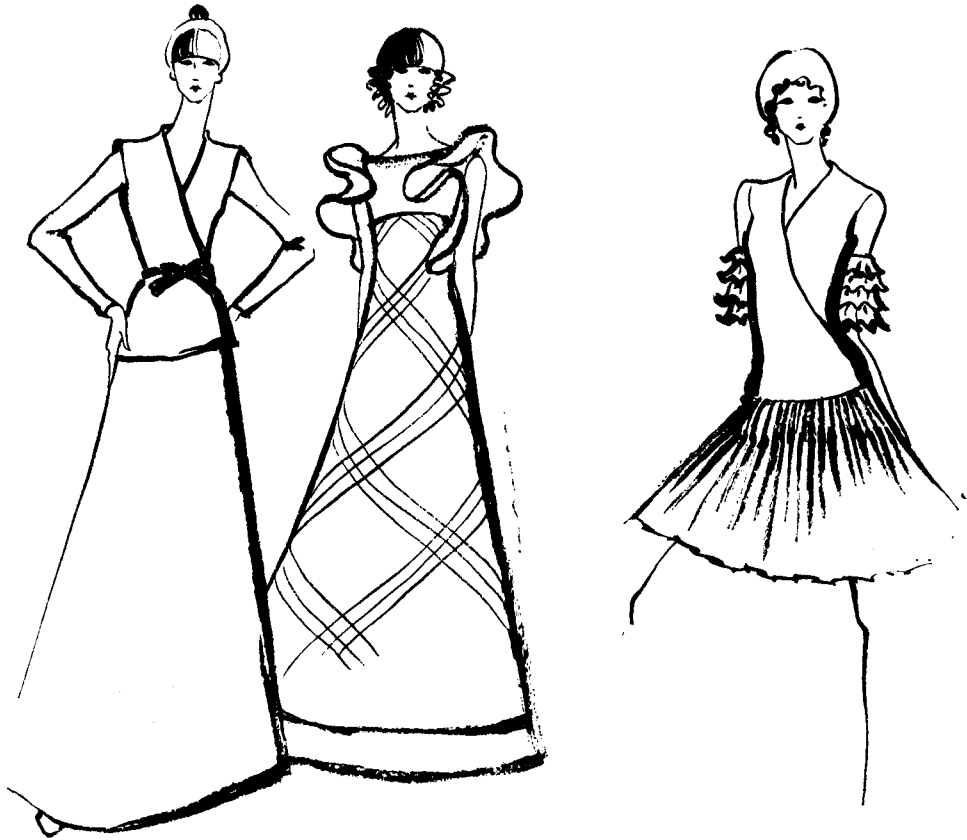


図16 La Roche 図17 Armand

図18 Feraud

どのディーティルが多く使われた。また色も前シーズンまで多く見られた黒がほとんど姿を消し、紺、白、赤、オレンジ、グリーン、黄、それにピンクなどのパステル調など、さわやかなムードの色が大勢を占めた。

これらの本格派モードに対して、ブレザールックや、白を基本にして他の色と組み合わせたセパレートツルックなど、若々しさを強調した機能派ファッションも多く見られたが、やはりすっきりとした上品さ、という印象のきわめて強いものだった。(図18)

しかし、このシーズンの第一の話題となったのは、サンローラン、カルダン、ニナ・リッチのパリ・コレクション不参加だった。三人の理由は少しづつ違ってはいるものの、根本的にはプレタポルテへのいっそうの傾斜であり、コレクションの意味やオートクチュールのあり方について、その後大きな問題を投げかけることになった。

'72~'73年秋冬のシーズンも、パリ・コレクションはクラシック路線を発展させることになる。ただしこの「クラシック」を日本語の「古典的」という言葉に当てはめるのは必ずしも正しいとはいえないだろう。むしろ「本質的」「基本的」という方がより近い意味を伝えている

からである。サンローランの次の言葉は、このクラシックの意味をよく伝えている。

「今までのあまりに派手な誇張されたモードは、着る人の個性を消していた。これからは個性を見出す時代である」

「現在女性たちは、今までよりぜいたくな服を求め、同時に買いやすい値段を望んでいる。そして、何シーズンも着られる基本的な、ほんとうの服を欲している」

現象的には、パンタロンとブーツが少なくなり、ひざまでのスカート、それもフレアー、プリーツ、ギャザーなどやわらか味のあるスカートが増えた。薄地のウールプリントのシャッドドレスや、すっきりとしたシルエットのスーツなど、「ドレス」という言葉から受けるイメージがカムバックした感じである。コート類はゆとりとボリュームがあり、しかも、しなやかなシルエットが多くなり、また戦後流行したトッパーが、スペンサー風のごく短いものから腰までの丈のものまで、いろいろな丈で現われた。

各店の傾向をたどると、サンローランは、コート、スーツともAラインを基本にして新しいクラシック感覚を追求し、ディオールは、シンプルなデザインを入念なカットや、テクニックで表現しながらエレガンスな女性美を追求、カルダンは、ボディコートや、シユミーズドレスを多用している。



図19 Ungaro 図20 Dior

またココ・シャネル亡きあとを継いだガストン・ベルテロ (Geaston Ber Thelot) は、多少の変化は見せながらもシャネル路線をつづけ、ウンガロには、プリントの重ね着や、細身のエレガントなコートに新しい女性像を求めるなど、それぞれの立場でのクラシックの追求がつづけられた。(図19, 20)

エレガンスの極限はシンプルシティ(飾り気のなさ、簡素さ)にあるのではなかろうか、と感じさせたのが'73年春夏のコレクションであった。そこには、眼を奪う奇抜さはもうほとんど見られない。

「ピュアー(純粋な)で、シ

ンプルで、ニート(きちんとした)で、フレッシュな感じこそ現代のファッションの核である」(サンローラン)

「みんながファッションに何らかの革命的变化を望んでいるようだ。だが、あなたが革命を期待しなくなったときこそ、ほんとうのファッション革命がやってくる。それはシンプルシティという新しさだ」(マルク・ポーアン)

これらの言葉は、このシンプルシティの本質を衝いているといえるだろう。

そして、最もシンプルなファッションはシャツルックである。したがって、プリーツやギャザースカートと組み合わせた、ヨークのあるシャツスタイルが多く見られた。プリーツやギャザーは、シャツスタイルに限らず大多数を占め、しなやかで、ほっそりとしたフィット・アンド・フレアーのシルエットが非常に多く現われた。

ディオールは、ウエストを細くしたルックを一貫して通し、ジヴンシー(Hubert de Givenchy)はいっそうシンプルで洗練された服というテーマを追求して、それぞれにクラシックの伝統を発展させた。サンローランは、柔らかい素材のパンタロンを中心に、「ボディベール」と彼が呼ぶシックなシフオンの肌に見えるようなドレスなどを使って、ヒップラインのぴったりのシルエットを造型した。モダン派のアルマン、ウンガロも、若々しい感覚とクラシックのイメージの統合に意欲を見せて注目をあつめた。(図21, 22)

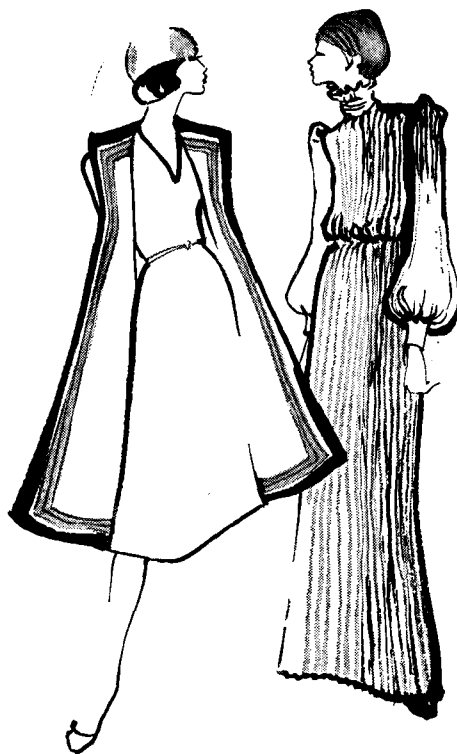


図21 Givenchy 図22 Ungaro



図23 Saint Laurent

'73~'74年秋冬のシーズンも、これまで数シーズン続いたクラシックなエレガンスというテーマには、根本的な変化は見られなかった。このシーズンの傾向を一言で表現すると「スポーティブ・デラックス（ぜいたくなスポーツ・ルック）」ということになるだろう。余分なもので飾り立てることをせず、着やすく自由なスタイルに、えりやそでに毛皮を使ったり、セーターにビーズ刺しゅうをほどこしたりして、ぜいたくな感じを出している。

新しいシルエットとして注目されているのがチューブライン。広いたっぷりとしたスカートに、胴を長く見せるほっそりとしたセーター類を組み合わせたり、丈の長いカーディガン・ジャケットを使っている。コートではチューブラインのほか、ケープのようにたっぷりとしたスティーマーコート、シャツコート、トレンチコートが多く見られた。

シンプリシティをいっそう徹底させて、洗練されたデザインを展開したサンローラン、カラーアンサンブルに冴えを見せたカルダン、多色使いの幾何学模様で長い丈の上着とプリーツスカートの組み合わせを見せたウングロなどそれぞれの個性によるスポーティブなエレガンスへの挑戦が見られたが、しかし残念ながら変化に乏しすぎるという印象は打ち消しがたい。(図23)

パリのオートクチュールは、またさらに新しい展開への岐路に立たされているのではなからうか。

Ⅲ パンタロンの流行とその意味

'69年のパリコレクションの中に登場し、たちまち世界に広がって、以後のファッションの中に定着してしまったのがパンタロンをはじめとするパンツルックであった。

つい数年前まではオフィスやレストランでは閉め出されることもあったパンタロンが、いまではスカートと並ぶ女性の基本的な衣服として、オフィス、レストランはもちろん正式な場でも堂々と着れるようになったのである。ことに既製服の分野では、主力商品としての地位を長く保ちつつけている。

いささか誇張していえば、パンタロンはいま服装史に一つのエポックをつくらうとしているのである。

ではこのパンタロンルックの流行と定着は何を意味するのだろうか。

現代のファッションの傾向の一つとして、「ステータスシンボルの否定」ということがよくいわれる。つまり、あるファッションが一つの国、一つの階級の独占物ではなくなりつつあるということである。

ファッションのインターナショナル化が進み、またオートクチュールデザイナーの既製服への進出が進むにつれて、ある一つのファッションは、たちまち全世界の一般大衆の間にひろがっていく。また、一般大衆の間でほとんど自然発生的に現われたファッションが、遂にオート

クチュールの中にとり入れられる傾向すら出てきている。パンタロンがそれであった。パリモードは、パンタロンに関しては一般大衆の後を追っていったといってもよい。その意味で、このパンタロンルックの流行は、パリモードの置かれている地位を表す象徴的なできごとであり、今後のファッションの動きに大きな影響を及ぼすものであるといえよう。

さらにもう一つの観点がある。

衣服のシルエットの作り方には、大きく分けて次の二つの考え方がある。一つは自然のからだの線をそのまま生かすシルエットであり、もう一つはからだの線を抑えたり補ったりしてつくりあげる「人工的」なシルエットである。

服装史をたどってみると、近代以前の女性の衣服は、大部分が後者、つまり人工的なシルエットにもとづいたものであることがわかる。日本の着物や西洋の18世紀の釣鐘型のパニエの上にはいたスカートなどはその典型といえる。

これに対して、現代のシルエットは、ほとんどが基本的には前者であり、しかもその傾向はますます増大している。パンタロンルックは、このからだの線に忠実なシルエットという考え方を、かなりの程度まで発展させたものである、というようにとらえることができるだろう。たしかに、柔らかい素材を使い、ヒップラインにぴったり沿って仕立てたパンタロンなどは「人間のからだ自体がドレスの素材である」といえるほどである。

これは、エロシズムに対する考え方の変化であると考えられよう。18世紀的な衣服をはじめとして、からだの自然な線をなるとにかくそうとするシルエットは、かくすことによって性的な想像力をかきたてようとするものであった。あるいは、肉体というものに対する一種の偏見があった。

これに対して、パンタロンのもつ自然なシルエットは、肉体を余分な拘束から解放し、健康なエロシズムを発散させるものであるといえる。現代の若い女性が肉体を羞恥心の対象としてではなく、むしろその美しさを誇るべきものと考えつつある傾向が、背後にあることは当然指摘できよう。さらに、女性ファッションの男性化、あるいはファッションのユニセックス化（男女の区別がなくなること）がある。

男性の女性化、女性の男性化、つまり両性の中性化の傾向は最近のあらゆる分野で見られるが、とくにファッションにおいてはいちじるしい。たとえば、ジーンズなどはその典型であろう。男性と女性との境界が消え去りつつあり、むしろ男と女であるより以前に個人であることを重視する考え方に立って、性を超越した服装観が生まれつつあるのである。パンタロンがこのような意識の変化を背景にして急速に伸びたことは疑いのないところであろう。

また機能性の問題がある。

これは先に述べたユニセックス化の問題とも関連するのだが、'72年の春ごろにアメリカの若い女性が、メンズパンツ、つまり男性用ズボンを愛用しているという興味あるニュースが報じられている。その理由として、メンズパンツは不必要なゆるみがなく、フィットしすぎて動

きにくいこともないので、きわめて実用的であることがあげられている。メンズパンツも色や柄が非常にファッションナブルになっているため、その点でも抵抗感が少ないともいえるだろう。

これは一つの極端な例かも知れない。しかし、女性の社会的進出がすすみ、生活環境や条件が急速に変化しつつある現代にあっては、パンタロンが本来そなえているシンプルな外観、からだを動かしやすい機能性などすぐれた現代性によって、受け入れられるべくして受け入れられていることがよく理解できる。

多分、パンタロンは今後とも女性の服装のクラシック（基本的）な型のひとつとして、長く生命を保ちつづけることであろう。

IV む す び

本稿では、'68年から'73年にいたるパリ・コレクションの流れのあとをたどり、その中にあらわれ、広く大衆のファッションの中に広がり定着していったパンタロン・ルックについてその意味を考えてみた。

パリモードも、かつてのように一部の階級だけのものとしてではなく、現代の生活と密着しながらその中で美を追求する方向、つまり新しい生活着というべきものを追求する方向に向っているように見える。おそらくこの方向は、ここ当分変わることはあるまい。これが現代のファッションに対する考え方の大勢であろうから。そして、その方向の中で、多くのデザイナーの努力や創造性によってより多くの豊かな衿りもたえられるであろうこともまた疑う余地がないように思える。

(1973, 8, 30) 短大家政学部教授